

## マルコによる福音書 6章 14節～29節

2015年12月17日

古本 靖久

1、聖歌 236番 「あけぼのを知らせる さきがけは生まれた」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 71 ページ）

4、テキストの位置

マルコによる福音書には、イエス様の出来事が中心に描かれています。しかし例外もあります。

その一つが今回の箇所です。ここではイエス様ではなく

洗礼者ヨハネが話の中心となります。ちなみにもう一か所は、1章1節からの「洗礼者ヨハネ、教えを宣べる」というところです。

どちらの箇所も洗礼者ヨハネに関する記事ですが、このヨハネの記事は福音書の中でどのような意味を持つのでしょうか。

また今日の場面は、弟子たちが派遣され6章30節で戻って来るまでの間に起こった出来事です。しかしマルコ福音書ではこの場所にあるのですが、ルカ福音書では3章19～20節という、イエス様が洗礼を受ける前のところまでに出て来ます。

それではマルコ福音書ではどうしてここに、この物語を配置されているのでしょうか。くわしく見ていきたいと思えます。

ガリラヤ湖 周辺での宣教 (奇跡)	5:21-24	ヤイロの信頼 (前半)
	5:25-34	イエスに寄り頼む女性の信頼
	5:35-43	ヤイロの信頼 (後半)
	6:1-6a	ナザレの人々は信頼できない
福音は外の世界へ	6:6b-13	弟子たちの派遣
	6:14-29	洗礼者ヨハネ、殺される
	6:30-44	食事の奇跡



## 5、節ごとに

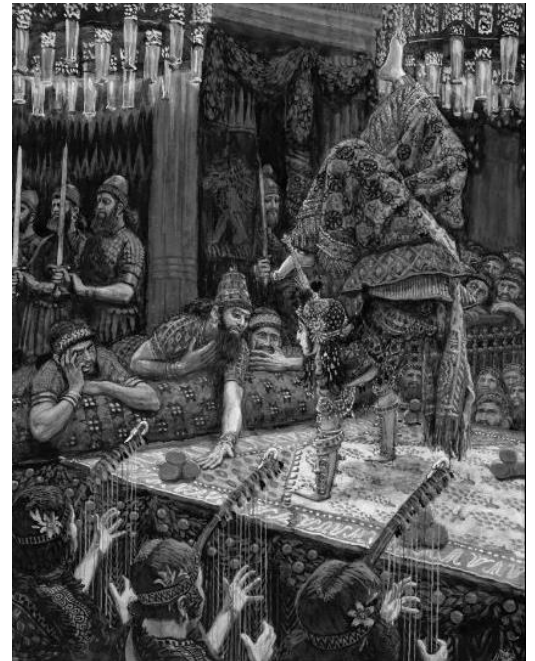
### ◆洗礼者ヨハネ、殺される

**6:14-15** (そして) イエス(彼)の名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼(のうち)に働いている。」そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、「昔の預言者の(一人の)ような預言者だ」と言う人もいた。

今日の箇所、中心人物は洗礼者ヨハネです。しかしこの物語が語られるきっかけは、「イエス様の名前が知れ渡った」ということでした。

イエス様の名はどのように広まっていったのでしょうか。イエス様ご自身によるいやしの業や奇跡、またその教えによって広まったのもあると思います。そして、12人の弟子が派遣されたことも忘れてはなりません。

マルコ福音書ではこの記事が弟子たちの派遣の後に配置されていると言いました。そこには「イエス様の名前は弟子たちによっても広められた」ということも意識されているのかもしれませんが。



マルコ福音書が書かれた時代の人々はこの記事を読むことで、自分たちもイエス様の名前を広める一人だという自覚を持ったのでしょうか。

さて、ヘロデ王というのは残虐なことで有名なヘロデ大王のことではなく、その息子のヘロデ・アンティパスのことです。彼を含む息子四人は、ローマの領土を四分割して分け与えられ、「王」という称号を名乗ることを許されませんでした。マタイやルカでは正しく「領主」と書かれています。

ともかく、その領土で一番偉いヘロデのところまで、イエス様の名前が知れ渡ったということです。人々は口々に言います。「彼は洗礼者ヨハネのよみがえりだ」、「エリヤだ」、「預言者の一人だ」。これらの答えは、8章28節にも見られます。このときには、イエス様は弟子たちに尋ねられているという違いがありますが。

しかしこれらの三つのイエス観は、いずれも不適切なものでした。マルコ福音書は弟子たちを含む多くの人々が、イエス様の本当の姿に気づかない様子を描いていきます。「イエスとは一体何者なのか」という問いが、福音書を貫いているのです。

6:16 ところが、ヘロデはこれを聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。

ヘロデはイエス様のことを、洗礼者ヨハネの後継者だと考えていました。ヨハネがよみがえりの奇跡を起こしたとさえ、思っていたのです。

このヘロデの言葉には、恐れや良心の呵責というニュアンスが含まれているとも取ることができるのではないのでしょうか。自分に罪の意識があり、自分がしたことに後悔をしているようにも感じられます。

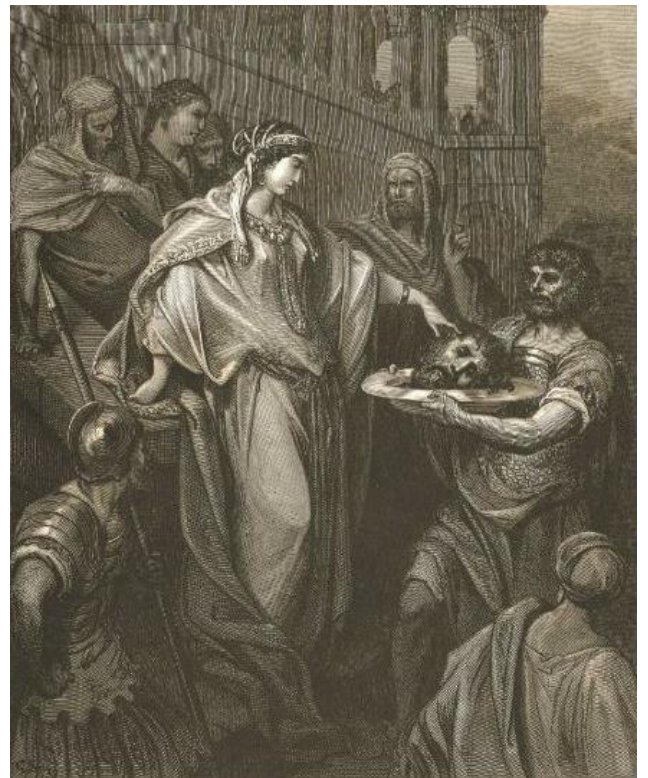
6:17-18 実は（というのは）、ヘロデは（自身が）、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており（たことについて）、そのことで人をやって（遣わして）ヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。ヨハネが、「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに（対して）言ったからである。

この時代の文献を見ていると、非常に複雑な人間関係が見られます。ヘロデ・アンティパスがここに出て来るヘロデですが、彼にはフィリポとヘロデ・ボエトス、そしてアルケラオスという兄弟がいました。マルコ福音書ではヘロディアはフィリポと結婚していたことになっていますが、史実ではヘロデ・ボエトスと結婚していたようです。

ちなみにフィリポは、ヘロディアの娘サロメと結婚しました。サロメといえば、後から出て来るヘロデの前で踊った女性とされていました。確実なことではないようです。

さて、ローマやギリシアでは兄弟の妻との結婚は問題ではありませんでしたが、ユダヤの律法では禁止されていました。レビ記にこのようにあります。「兄弟の妻を犯してはならない。兄弟を辱めることになるからである。」（レビ 18:16）

しかし律法では確かに禁止されていることでも、時の権力者に向かって、その誤りをはっきりと言うことは、その身に危険が及ぶことを意味していました。事実、洗礼者ヨハネは捕えられ、牢につながれることになりました。



**6:19-20** そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。なぜなら、ヘロデ（の方）が、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、（彼を）保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けて（彼の言うことを聞いて）いたからである。

ヨセフスというこの時代の歴史家によると、ヘロデが洗礼者ヨハネを殺害したのは、民衆に対する彼の影響力に対してヘロデが恐れを抱いたからだとされています。しかし福音書では、結婚批判という極めて個人的な理由になっています。

どちらも、ヘロデが洗礼者ヨハネを殺害した理由の一つなのでしょう。しかし福音書は、権力を持っている人を批判する洗礼者ヨハネの姿を強調します。

そしてその姿は、旧約聖書の預言者エリヤの姿と重なります。エリヤは時の権力者アハブとイゼベルに対して神さまの言葉を告げていきました。そして洗礼者ヨハネは、預言者エリヤの再来だと言われていました。またエリヤは、終末の前に先駆者として、再来することが期待されていました。そのエリヤの姿に洗礼者ヨハネを重ね合わせることによって、洗礼者ヨハネはイエス様の先駆者なのだということを、人々に強く印象づけるのです。

しかしなぜヘロデは、洗礼者ヨハネの言葉に喜んで耳を傾けていたのでしょうか。知恵を得たいと思っていたのか。相談事があったのか。単に暇つぶしにいろいろと聞いていただけなのか。「当惑」していたのですから、ある程度真剣にきいていたのでしょうか。

**6:21-23** ところが（そして）、良い機会が訪れた。ヘロデが、自分の誕生日の祝いに（自分の）高官（たち）や将校（千人隊長）、ガリラヤの有力者などを招いて宴会を催すと、ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言い、更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と固く誓ったのである。

ヘロデは、洗礼者ヨハネを殺そうとするヘロディアと、自分の良心との板挟みになっていました。そしてヘロディアにとって、自分の思いをかなえるよい機会が訪れます。

ヘロディアの娘は踊ります。このように人前で踊ることは、王の娘という立場では考えられないことでした。またこのころの踊りの多くは、決して品の良いものではなかったようです。しかしそれでもヘロディアは、娘を躍らせます。ここにヘロディアの強い悪意が見て取れます。

またヘロデが娘に言った言葉は、エステル記 5 章 3 節、7 章 2 節を想起させます。

**6:24-26** (そして) 少女が座を外して(出て行って)、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。早速(すぐに)、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。

きっと母親ヘロディアは、ヘロデだったらこのようなことを言うと分かっていたのでしょう。最初から娘に、「ヘロデが何か約束したら、すぐにわたしのところにおいで」と言っていたのかもしれませんが。

母親は自分の目的を達成するために、手段を選びませんでした。洗礼者ヨハネを殺害するために、自分の娘を使い、夫ヘロデを利用します。

この場面、イエス様が十字架につけられるところと比較してみたいと思います。洗礼者ヨハネを殺したかったのはヘロディアでした。イエス様を十字架につけようと思っていたのは、ファリサイ派や律法学者などの宗教指導者でした。彼らは支配者に、決断を迫ります。



しかし支配者である二人は、ヘロデもイエス様を尋問したポンティオ・ピラトも躊躇します。本当にこのまま命を奪ってよいものなのか。命を助けようとする場面すら見られます。ところがさらに、彼らは追い詰められます。ヘロデは客の前で、ピラトは群衆の前で、後戻りできない状況に置かれるのです。このように洗礼者ヨハネの出来事は、イエス様の十字架を予示するものとして描かれるのです。

**6:27-28** そこで(すぐに)、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は(そして)出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、(そして彼の首を)盆に載せて持って来て少女に渡し(与え)、少女はそれを母親に渡した(与えた)。

ヘロデは自分の名誉を守るために、洗礼者ヨハネの首をはねます。ピラトが群衆を恐れ、イエス様を十字架につけることを決断した場面が思い起こされます。

自分の娘と妻が生首を受け渡しているこの場面を、ヘロデはどのような気持ちで見えていたのでしょうか。

**6:29** (そして) ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、(彼の) 遺体を引き取り、墓に納めた。

洗礼者ヨハネの遺体は、弟子たちによって引き取られました。ヘロデはそのような行為を許したようです。遺体を引き取るという行為は、イエス様の十字架の場面にも出てきます。アリマタヤ出身のヨセフがピラトに申し出て、イエス様の遺体を引き取っています。

そしてヨハネもイエス様も同じように、墓に納められました。ここまでは本当に同じような物語です。ヨハネはイエス様の先駆者としてその生涯を終えたのです。

しかしその後が違います。埋葬が洗礼者ヨハネの最期でしたが、イエス様の場合は最期ではありませんでした。イエス様は墓から出られ、復活されました。ここに洗礼者ヨハネとイエス様との大きな違いがありました。

### <今日の箇所から>

洗礼者ヨハネは、イエス様の出来事を先取りする者として描かれます。イエス様の運命である受難を予示するのです。ルカ福音書ではさらに誕生予告や命名、誕生にいたるまで、イエス様の先駆けとしてのヨハネを強調しますが、マルコ福音書は受難のみに焦点を当てます。

洗礼者ヨハネは首をはねられました。わたしたちはこの物語を、どのような立場で読んでいるでしょうか。マルコ福音書は復活のイエス様に出会うまで、イエス様の本当の姿を理解せずに何度もイエス様を裏切って来た人々の姿を描きます。読者は福音書の記事を読むときに、自分は今、どの人と同じことを考えているのだろうか、どの人のように行動しているだろうかと、思い巡らせるように促すのです。

あなたは今、ヘロデのように、自分が人からどう思われるかを気にして、大切なものを裏切っていないでしょうか。

あなたは今、ヘロディアのように、自分の弱いところや気づかれたくないところを暴かれるのを好まず、何とかして隠し通したいと思っていないでしょうか。

あなたは今、ヘロディアの娘のように、悪いことだと知っていながら、自分には責任がないかのように物事をおこなっていないでしょうか。

いろいろな場面を想像しながら、自分を振り返っていきたいと思います。

今回の学びはこれで終わります。次回は1月28日(木)10時30分からです。「5000人に食べ物を与える」(マルコ6:30~44)について学んでいきます。